



ミモザ

144 編は端書きに、**ダビデの詩**とあります。140 編から続いてきたダビデの歎きの祈りと趣が変わり、最後に **いかに幸いなことか、このような民は。いかに幸いなことか／主を神といただく民は。(15)** と 2 回 **幸いな** と繰り返して述べているように、祝福を感謝する賛歌です。

1 連は **主をたたえよ** との賛美の言葉から始まり、詩人にとって **主** とはどのような存在であるかを語ります。

(1) **わたしの岩**、不動、巨大、堅牢な基盤、土台である方。

(2) **手に闘うすべを／指に戦するすべを教えてください**、と戦いに勝利を得させてくださる知恵、力となる方。

(3) **わたしの逃れ場、わたしの盾、避けどころ**、と安全、平安憩いを与えてくださる方。

(4) **諸国の民をわたしに服従させてくださる方**、と詩人に **主** によって全ての民を統治する力を与えてくださる方。

詩人は、まず、主なる神への絶対的な信頼に立って、すべての賛美を捧げます。

2 連では、**主** が、人間を圧倒的な力で祝福し、守護してくださることを思い、**主よ、人間とは何ものなのでしょう(3a)** と、感嘆の声をあげます。**あなたがこれに親しまれるとは。／あなたが思いやってくれるとは。(3b)** と、**主** は、人と人格的ふれあいをされる方であると受け止めます。その **主** の前で、**人間は息にも似たもの／彼の日々は消え去る影。(4)** と、すぐに消え失せる、儚い存在であると詩人は思わずにいられません。このような小さな存在への **主** の愛は圧倒的で廣大無辺と感じます。

3 連は、改めて再び、目を **主** に向け、**主** の天地、万物を支配される力を褒め称えます。**主よ、天を傾けて降り／山々に触れ、これに煙を上げさせてください。飛び交う稲妻／うなりを上げる矢を放ってください。(5、6)** **主** の力を **主** に逆らう者に向けて、御手を遣わしてわたしを解き放ち／大水から、異邦人の手から助け出してください。(7) と、救いを求めています。

4 連は **主** に従う者の喜びをうたいます。**神よ、あなたに向かって新しい歌をうたい／十弦の琴をもってほめ歌をうたいます。あなたは王たちを救い／僕ダビデを災いの剣から解き放ってください。(9、10)** また、異邦人からの救いと彼らへの裁きを再び求めています。

5 連は段落がついていて、引用のようにも感じますが、女性、しかも母の言葉ではないかと想像します。**大事に育てられた苗木** である息子、色とりどりの **飾りにも似た娘**、**倉は／さまざまな穀物で満たされ**、**羊の群れは野に、牛はすべて、肥えて**、**都の広場には／破れも捕囚も叫び声もない**。子らを育む喜びがあり、満ち足りる食事があり、平和で静かな社会はなんと幸せなことでしょう。

詩人は **いかに幸いなことか、このような民は。いかに幸いなことか／主を神といただく民は。(15)** と、賛美を締めくくっています。

『讚美歌 21』には関連讚美歌はありません。ジュネーブ詩編歌はピオラ・ダ・ガンバの重奏と変奏による静かな小品です。

<https://www.youtube.com/watch?v=JaJ9xspcPb8&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=144>